

(目的)

第一条 この規則は、刑事再審弁護活動に対する援助に関する規程（会規第一百八号。以下「規程」という。）第三条の規定に基づき、死刑判決が確定した者に対する権利擁護の緊急性及び刑罰としての不可逆性に鑑み、規程第二条第一号の援助の内容、援助金の支出基準、援助の要件及び手続その他援助の実施に必要な事項を定めることを目的とする。

2 弁護士法人及び弁護士・外国法事務弁護士共同法人（以下「弁護士法人等」という。）については、弁護士法人等の社員又は使用人である弁護士による法律事務の取扱いを当該弁護士法人等による法律事務の取扱いとみなしてこの規則を適用する。

(援助の内容)

第二条 本会は、死刑判決が確定した者の再審請求事件（第四条第一項の申込みの時点で死刑判決が確定した者が死亡している事件を除く。以下「死刑再審請求事件」という。）について再審請求を行い、又はその準備を行う者（以下「対象者」という。）の弁護士又は弁護士となる者（以下「弁護士等」という。）の死刑再審弁護活動（再審請求審、即時抗告審（即時抗告に代わる異議審を含む。）及び特別抗告審を含む一連の死刑再審請求事件（再審請求の準備を含む。）における弁護活動をいう。以下同じ。）に対する援助（以下「死刑再審弁護活動援助」という。）を行う。

2 死刑再審弁護活動援助の内容は、別表の援助の内容の欄に掲げる内容及びこれに附帯する事務とする。

(援助金の支出基準)

第三条 本会が、死刑再審弁護活動援助のために支出する援助金（以下「援助金」という。）の基準の額は、別表のとおりとする。ただし、弁護士等としての実質的な活動があると認められない場合は、援助金を支出しないものとする。

(援助の要件等)

第四条 弁護士等は、次の各号に掲げる対象者の区分に応じ、当該各号に定める要件の全てを満たす場合は、死刑再審弁護活動援助の申込み（以下「申込み」という。）をすることができる。

- 一 再審請求を行った者 次のイ及びロに掲げる要件
 - イ 再審請求が不合法でないこと。
 - ロ 再審請求に理由がないことが明らかとはいえないこと。
- 二 再審請求の準備を行う者 当該弁護士等の調査により、再審請求に理由があるものとすることができる事実又は証拠を発見できる可能性があること。
- 3 申込みは、書面によるものとし、申込みをする弁護士等は、当該弁護士等の署名又は記名押印のある会長が細則で定める様式の申込書及び次に掲げる書類を提出しなければならない。ただし、再審請求前に申込みをする場合は、
 - 一 死刑確定判決の謄本又はこれに代わるもの
 - 二 再審請求書の写し
 - 三 再審請求事由を疎明する資料の写し
- 4 同一の死刑再審請求事件について弁護士等が複数となる場合は、代表する者（以下「代表者」という。）による一の申込みとしなければならない。
- 5 本会は申込みがあったときは、当該申込みの審査を行う。この場合において、本会は、必要があると認めるときは、申込みをした弁護士等（前項の規定により代表者が申込みをしたときは、当該代表者をいう。以下「申込者」という。）に対し、申込書等の書面の補正、第一項に規定する要件に関する資料の提出等を求めることができる。

6 本会は、前項の審査に当たり、関係委員会の意見を聴くことができる。

(援助の開始等)

第五条 本会は、前条第五項の審査の結果、同条第一項に規定する援助の要件に該当すると認めるときは、別表に基づいて支出すべき援助金の額その他必要な事項を定めて、死刑再審弁護活動援助の開始決定（以下「援助開始決定」という。）を行う。

2 本会は、前条第五項の審査の結果、同条第一項に規定する援助の要件に該当しないと認めるとき、又は申込者が同条第五項に規定する補正等の求めに応じないときは、死刑再審弁護活動援助を開始しない旨の決定を行う。

3 本会は、前二項の決定をしたときは、その理由を付して申込者に通知する。

(変更の届出)

第六条 申込者は、第四条第三項の申込書に記載した事項について変更があったときは、速やかに、変更内容を本会に届け出なければならない。当該死刑再審請求事件に係る死刑判決が確定した者が申込み後に死亡し、その配偶者、

直系の親族又は兄弟姉妹が再審請求を引き継ぐ場合も同様とする。

2 申込者は、辞任、解任その他の事由により当該死刑再審請求事件の弁護士等でなくなったとき（代表者以外の弁護士又は弁護士法人等のいずれかが弁護士等でなくなったときを含む。）、又は新たに当該死刑再審請求事件の弁護人等が加わったときは、速やかに、その旨を本会に届け出なければならぬ。

3 代表者につき第九条第一項第三号から第九号までに掲げる事由があるときは、当該代表者以外の弁護士等（同項第三号から第九号までに掲げる事由がある者を除く。）は、自らを代表者とする旨の変更を届け出ることができる。（変更決定等）

第七条 本会は、前条第二項又は第三項に規定する届出がなされたとき、又は援助金の額を変更する必要があるときは、審査を行った上で、変更の決定（以下「変更決定」という。）をすることができる。この場合において、本会は、審査の結果、援助金を追加して支出する必要があると認められるときは追加で支出する旨及びその額を決定し、援助金の減額をし、又は既に支出した援助金の全部若しくは一部の返還を受ける必要があると認められるときは減額をし、又は返還を求める旨及びその額を決定することができる。

2 本会は、変更決定をしたときは、その旨及び内容を申込者に通知する。

（申込者による終結の報告）

第八条 申込者は、援助案件（援助開始決定を受けている案件をいう。以下同じ。）が終了したときは、援助案件が終了した日から六箇月以内に、申込者の署名又は記名押印のある会長が細則で定める様式の終結報告書を本会に提出しなければならない。

2 申込者は、援助案件が終了した日から六箇月以内に前項の終結報告書を本会に提出しないときは、当該期限を経過した理由を本会に申し出なければならぬ。

（終結等）

第九条 本会は、次に掲げる事由があるとき（第三号から第九号までに掲げる事由がある場合であつて、申込者を変更する変更決定がなされたときを除く。）は、審査を行い、当該死刑再審弁護活動援助の終結決定（以下「援助終結決定」という。）をする。この場合において、本会は、審査の結果、援助金を追加して支出する必要があると認められるときは追加で支出する旨及びその額を決定し、援助金の減額をし、又は既に支出した援助金の全部若しくは一部の返還を受ける必要があると認められるときは減額をし、又は返還を求める旨及びその額を決定することができる。

一 援助案件が終結し、申込者から終結報告書が提出されたとき。

二 死刑再審弁護活動援助を継続する必要がなくなったとき。

三 申込者が辞任し、又は解任されたとき。

四 申込者が、正当な理由なく援助案件の処理を遅滞し、又は中止していることその他の事由により死刑再審弁護活動援助を継続させることが適当でなくなったとき。

五 申込者（申込者が弁護士法人等である場合は、その法律事務所を含む。）が懲戒処分（戒告を除く。）を受けたとき。

六 自然人たる申込者が死亡したとき。

七 自然人たる申込者が弁護士でなくなったとき。

八 弁護士法人等たる申込者が解散したとき。

九 弁護士・外国法事務弁護士共同法人たる申込者が種類の変更により、外国法事務弁護士法人となったとき。

2 本会は、申込者から前項第一号の終結報告書が提出されない場合であっても、援助案件が終結したと認めるときは、援助終結決定をすることができる。

3 本会は、援助終結決定をするに当たり、必要があると認めるときは、申込者の意見を聴くものとし、申込者に対し、第一項の事由に関する資料の提出を求めることができる。

4 本会は、援助終結決定をするに当たり、関係委員会の意見を聴くことができる。

5 本会は、援助終結決定をしたときは、その内容を申込者に通知する。ただし、当該申込者の所在が知れないときは、この限りでない。

（援助金の支払）

第十条 援助開始決定において支出する援助金の額の定めがあるときは、本会は、速やかに、申込者にその額を支払う。変更決定又は援助終結決定において、追加して支出する援助金の額の定めがあるときも、同様とする。

（不服申立て）

第十一条 申込者は、この規則に基づく決定に不服のある場合は、本会に対し、不服申立てをすることができる。

2 不服申立てをする者（以下「不服申立人」という。）は、当該決定があったことを知った日から十日以内に、不服申立書を本会に提出しなければならない。

3 前項の不服申立てがあつたときは、本会は、速やかに、不服申立ての内容について審査し、理由を付してその採否を決定する。

4 本会は、不服申立人に対し、前項の規定により決定をした旨及び内容を速やかに通知する。

(更正の決定)

第十二条 本会は、この規則に基づき本会がした決定に計算違い、誤記その他これらに類する明白な誤りがあるときは、いつでも更正の決定を行うことができる。

2 本会は、前項の決定をした場合は、申込者に速やかに当該決定及びその理由を通知する。
(細則への委任)

第十三条 この規則に定めるもののほか、死刑再審弁護活動援助の実施に関して必要な事項は、会長が細則で定める。

附 則

この規則は、令和六年四月一日から施行する。

別表（第2条、第3条、第5条関係）

援助の内容	費用に対する援助金		弁護活動に対する援助金	
	基準額	備考	基準額	備考
弁護人等としての活動（再審請求審、即時抗告審（即時抗告に代わる異議審を含む。）及び特別抗告審を含む一連の死刑再審請求事件（再審請求の準備を含む。)) 全般	2万円	①費用（②及び③を除く。）に係る疎明資料を提出した場合は、5万円を上限とする実費とする。 ②通訳又は翻訳を必要とする場合であって、そのための実費が発生するときは、20万円を上限に別途加算する。 ③医師その他の専門家が意見書等を作成する場合であって、当該専門家に支払うべき実費が発生するときは、30万円を上限に別途加算する。	22万円	①第4条第4項の代表者による申込みがなされた場合であって、援助の対象となる弁護人等が2人のときは44万円、3人以上のときは66万円とする。 ②事件の進捗その他の事情を考慮し、減額することができる。